

4番目の許婚候補3

目次

4 番目の許婚候補3	5
共同戦線 side 田中雅史	233
大事な家族 side 上条沙耶子	245
狩りの始まり side 仁科(佐伯) 彰人	263

4番目の許婚候補3

第1話 小さな変化

「まなみちゃん、『あれ』以来、会社での噂はどうなったの？」

十月のある日曜日。私——上条まなみ——は、三条邸の居間で久しぶりに全員集合した従姉妹たちとお茶を飲んでいた。

一歳年下の従妹、真央ちゃんの問いかけに、私は答える。

「会社での噂？ ああ、あの噂ね」

私はこれまでに二度、会社で噂の的になってしまったことがある。

一度目は、三条家の御曹司で私の従兄でもある三条透と、上司の仁科彰人係長が会社の受付ロビーで私を奪い合ったというもの。

二度目は本当について最近のことで、先の噂が事件を呼び、透兄さんを前々から狙っていた早坂商事のお嬢様が私の会社へ乗り込んできた時のことだ。そこになぜか従姉の真綾ちゃんと仁科係長も駆けつけて、壮絶な五角関係(?)……とにかく修羅場を繰り広げた、ということになっていった。もちろん根も葉もない噂だ。

一度目の騒動は数ヶ月前のことだし、人の噂も七十五日ということわざ通り、もう下火になって

いるから、真央ちゃんが知りたがっているのは二度目の件だろう。

「幸い前の噂と違って、あまりに嘘くさくて、わりとすぐに静かになったよ」

SAEKI情報システムに入社して二年目の私は、新事業推進統括本部で企業調査チームの一員兼、部内の秘書を務めている。兼任というやり手のようだけど、どっちも補佐的な役割にすぎなくて、まだまだペーペーの身だ。性格も容姿も至って普通で、どこにも目立つ要素はない。

それでも、透兄さんと係長との三角関係は、まだ少しは疑う余地ありついで長く噂になっていたけど、二度目は一般庶民な私と超エリートセレブな四人という組み合わせの不自然さから、冗談まじりに噂が広まった感じだった。だから、あつという間に噂もおさまった。

「それはよかったじゃん。まなみちゃんの素性を勘ぐられることもなかったんでしょ？」

「うん。これも幸いに」

——素性。なぜ私が、二度も会社で噂の的になってしまったのか。その理由のすべてが、素性に関係している。

実は私、国内屈指の大企業を経営している三条家と血縁関係なのだ。

母方の祖父は三条家の当主で、私も孫娘に当たるけれど、ここにいる従姉妹たち——真綾ちゃん、舞ちゃん、真央ちゃんみたいにお嬢様というわけじゃない。中小企業に勤める父と三人で暮らす、一般的なサラリーマン家庭の娘だ。

顔立ちだって美形揃いのイトコたちとは似てないから、一見血がつながっているようには見えないただろう。それはそれで少し複雑だけど、三条家の一員であることを、会社では内緒にしている私

にとつては不幸中の幸いだ。

え？ なぜ隠しているのかつて？

だって、別の企業の経営者一族が働いているって、変に勘ぐられても困るでしょう？

私は平凡だけど平和に暮らしていければ、それでいいと思っっている。だから、三条家にゆかりのない会社に就職もしたのだ。

それともう一つ、重大な理由がある。

「まなみちゃんってば、よりによって透お兄ちゃんと例の仁科彰人さんと噂になるだなんてね」

真央ちゃんが、くすくすと可笑しそうに言う。

「笑い事じゃないよ」

私は口を尖らせた。あの時は本当に、生きた心地がしなかったのだ。

私が会社で素性を明かしたくない最大の理由。それは今、真央ちゃんが仁科係長を「例の」と言っただけにも関係がある。

私の上司である仁科係長——仁科彰人さんの本当の名は佐伯彰人さえきあきらで、日本屈指の大企業・佐伯グループの御曹司なのだ。つまり、私がうっかり就職してしまった会社を統括するグループの一人息子というわけ。

彼もまた、素性を隠して働いているらしい。系列会社で武者修行をしている、といったところだろうか。

しかも……三条家と佐伯家の間には結婚話が持ち上がっていて、ゆくゆくは私たち従姉妹のうち

の誰かが、係長のところへお嫁に行かなければいけないらしい。

真央ちゃんの言う「例の」には、そんな理由がある。

ちなみに許婚候補の筆頭として名前が挙がっているのは、三条家の内孫である従姉の舞ちゃんまいなんだけど、もし駄目なら別の従姉妹を次の候補に、という算段らしい。私は内孫ではないし、お嬢様でもないから最後の四番手の許婚候補だ。

だから、本来ならばこんなややこしい事態に巻き込まれず、平穏な生活を送れると思っっていたのに……

縁談のことを知らされたのは、今の会社に就職が決まったあとで、その後も偶然が重なって「例の」仁科係長と同じ課に配属されてしまった。さらに色々あって部内の秘書業務も兼任しているから、係長である彼と接触する機会がますます増えてしまった。入社当初は、適度に距離を保っていたはずなのに。

「でも、その噂は消えたんでしょ？」

と口を挟んだのは、従姉妹の中で一番年上の真綾ちゃんだ。

「消えたけどねえ、確実に傷跡を残したというか……」

私はコーヒーカーップを持ったまま、ちよつと遠い目をした。

「二度にわたる騒動のせいで、係長の熱心なファンの方々の目が厳しくなってる……」

事情を分かってきている所属部署では大丈夫だけど、最近、他部署の女性社員の視線が痛い。とくに秘書課のお姉さま方に、やたらと睨まれるようになった。面と向かって嫌がらせをされたこ

とはないけど、すれ違いざまに「調子にのってるんじゃないわよ」なんて言われたり。

「ああ、モテそうだもんね、あの人」

「だよ、透お兄ちゃんとはまた違った美形っぶりだったよね！」

真綾ちゃんと真央ちゃんは、私の言葉に熟知り顔でうなずき合っている。真綾ちゃんは先日会社で、真央ちゃんは前、一緒に参加した合コン会場で係長を見かけたことがあるのだ。

「係長が美形なのもモテるのも否定はしないけど、なんで私が災難に遭うの……」

とにかくこれ以上、目をつけられないようにしないと！

……とは思うものの、最近とくに構われ具合が激しくなっているような気がしないでもない。時々、ご飯とかお茶に誘われるし。頭を撫でられるのもしょっちゅうだ。だからこそ、秘書課のお姉さま方は、面白くないのだろうけど。

そんなことを考えていると、不意に足元のバッグの中からメール受信を告げる携帯の着信音が鳴り響いた。

「会社の携帯がなんで休日……？」

私はバッグから携帯を取り出す。土日に連絡だなんて、何かあったんだろうか。

「会社？ 誰から？ 誰から？」

真央ちゃんがおかを期待するような顔つきで聞いてくる。

私はメールのアドレスを確認しながら答えた。

「係長」

メールの送り主はちょうど今、話題にしていた仁科係長だった。

「ふおおおおお！」

真央ちゃんがおかを上げておいてくれるけれど、私は構わずメールを開く。

仁科係長は明日から二日間の予定で出張に行くことになっている。今回その出張の手配をしたのは私で、連絡があるということはそれに関連することに違いない。

案の定メールは、出張についてのもので、急遽別案件の資料も持参することになったと書かれていた。明日、出社したら資料のデジタルデータをメールで送ってほしいとのことだ。

私は素早く返信画面を開いて了承の返事をした。

すると、数分後にはふたたび係長からメールが。

『ありがとう。休日なのに邪魔してすまないね。このお礼は必ずするから。お土産も期待してくれ』

お礼を言われるほどではないけれど「お土産」の文字についていっさい心が躍る。

そんな私の様子を見ていた真央ちゃんが、ニヤニヤと笑みを浮かべながら言った。

「休日なのにメールが来るなんて、まなみちゃんつてば、係長さんと仲いいじゃん！」

「へ？ これ、会社の携帯だよ？ 仕事の話だよ!?」

私は慌てて携帯をかざしながら言った。こんな仕事上のやりとりで、係長との仲を疑われるなんて心外だ。

「ほう、ほう」

けれど真央ちゃんのニヤニヤは止まらない。からかわれているのだと分かっているけど、反論せずにはいられなかった。

「係長と私は、お互いにプライベートで使ってる携帯の番号なんて知らないよ。会社支給の携帯だけ。しかも純粋に仕事のやり取りしかしてないんだから！」

「でもお姉ちゃんの話だと、係長さん、早坂の馬鹿お嬢がまなみちゃんに会社に乗り込んだ時、心配してわざわざ様子を見に来たんでしょう。それって、上司として部下を守るっていう職務の範疇じゃないよね？」

「だからそれは、騒動の発端が係長にもあったからであって——」

言いかけて、これ以上真正面からやり合っても無駄だと判断した私は、追及をかわすべくもう一人の従姉——舞ちゃんに無理やり話を振った。

「私のことより舞ちゃんは？ 舞ちゃんの会社に誰かいい人いないの？」

「え？ 私？」

さつきから一言も発さず私たちのやり取りを傍観していた舞ちゃんは、突然話の矛先が自分に向けられて目を丸くする。

「そうそう、瀬尾エンジニアリングも大きな会社で、舞ちゃんの部署には男性社員だつて多いんですよ？ 誰かいいなあと思う人はいないの？」

舞ちゃんは今、真綾ちゃんや真央ちゃんのお父さんが経営している会社で働いている。従弟の瀬

尾涼というお目付け役がいるとはいえ、男性と知り合う機会はいっぱいあるはずだ。

舞ちゃんも私と同じように勤め先の会社では素性を隠しているし、声をかけられていてもおかしくない。

「あ、私もそれは聞きたい！」

真央ちゃんが話題に食いついた。

「舞ちゃんを巡って、男性社員が殴り合いのケンカをしていても驚かない！」

「そんなことないわよ」

くすくす笑う舞ちゃんだけど、まっすぐ伸びたストレートの髪も気品のある顔立ちも、まるで高価な人形のように美しく、どこにいたって人目を引く。真央ちゃんの言うように世の男性が放っておくはずないと思うのだけど、浮いた話は一切聞かない。

「わが社には真綾ちゃんというマドンナがいるしね。それに私が所属する経理課は男性社員が少ないう上に、ほとんど妻子持ちよ。そんな色っぽい話になんてならないわよ」

まるで舞ちゃんから男性を遠ざけているような……作爲的なものを感じるのはいかかな？

「そんなこと言って、本当は舞ちゃん、経理課のマドンナって言われているのよ」

真綾ちゃんが笑いながら口を挟んだ。

「だけど、誰のお誘いも断っちゃってるの。それにどうも経営者の子息である涼が同棲中の彼氏と
思われているみたいで、すっかり高嶺の花扱いよ」

「げっ、涼？」

私と真央ちゃんは同時に呻いた。

従弟の涼は、部屋は違うけれど真綾ちゃんや舞ちゃんと同じマンションに住んでいるのだ。時々送り迎えもしているそうだから、連れ立って帰宅したら、同棲しているように見えるかもしれないけれど……

「よりによって、涼！」

「絶対それって確信犯だね。舞ちゃんに群がる男どもを追い払うために、誤解されると分かって、一緒に出入りしているんだよ、あいつは。ああ、やだよ。どうしてあんな陰險な奴が弟なんだろう！」

「そんなことは……。まあ、でも実際、少ししつこく誘ってきた人がいた時は、涼に助けってもらったから……」

苦笑して言った舞ちゃんの歯切れが悪いのは、涼の「男避け作戦」のおかげで助かった部分もあるからだろう。だけどやっぱり近づく男を片っ端から排除するやり方は、いかがなものかと思う。

「舞ちゃん！」

私は向かいに座っている舞ちゃんの手をぎゅっと握って言った。

「あんな過保護で束縛してくる男に、感謝する必要なんかないんだよ。それに、せっかく三条家から離れて暮らしているんだから、もっと普通の会社員っぽい生活を楽しんでいいと思う」

しゃべりながら感情的になっていった私は、不意に言わなければならぬ気がして、少しの間を置いて口にしていった。

「男の人と知り合って、いっぱい話をして……恋だっと思っていいと思う」と。

許婚の筆頭候補ということになっているけど、舞ちゃんは嫌がっている。無言の抵抗として家出までした。その甲斐あつてか、とりあえず二年後まで保留って形になったけど、時間が経ったところで舞ちゃんの気持ちは変わらないだろう。その期限も、あと半年に迫っている。

そもそも、期限がこまいが、舞ちゃんがそれに縛られる必要はないと思う。相手の係長だっつて、この一年半の間に何人もの女性と付き合っていたのだし。

「まなみちゃん……ありがとう」

舞ちゃんがふわっと笑った。それはとても綺麗で、だけどどことなく儂さを感じる笑顔だった。……あとになって思う。この時、舞ちゃんはどんな気持ちで笑顔を作っていたのだろう。

私は楽観的にも、本人たちが望んでいない以上、何とかなるさと思っていた。と同時に、自分は許婚候補とはいえ四番目で、お鉢がまわってくることはないだろうと、どこか他人事と捉えていた。

——けれどこの時すでに、私の知らないところで何かが少しずつ変わり始めていた。

第2話 携帯番号

『係長と私は、お互いにプライベートで使ってる携帯の番号なんて知らないよ。会社支給の携帯だ

け。しかも純粋に仕事のやり取りしかしてないんだから！」
そう真央ちゃんに言ったのは、ついこの間のことだ。けれど、どうやらそれは訂正しなければならぬらしい。

仕事終わりのサラリーマンやOLさんで賑わう釜飯屋で、私は今、なぜか仁科係長と向かい合っていた。

「というわけで携帯電話出して……？」

きこの釜飯を口に入れた状態で、私は差し出された手をポカーンと見つめる。

今の係長の言葉は、上司命令なのだろうか。いや、いくらなんでもそれはないだろう。

そんなことを考えながらも、私はご飯を咀嚼して吞み込むと、素直にバッグからプライベート用の携帯電話を取り出して、仁科係長の手のひらにのせた。

「ありがとう。ちょっと借りるね」

仁科係長は微笑むと、スーツの内ポケットから自分の携帯電話を取り出して操作し始めた。次いで、私の携帯を手にして何やらピコピコと操作をしている。

その光景を横目に、私は茶碗によそった釜飯を口に入れ、もぐもぐと咀嚼する。

ああ、すごく美味しい！ この釜飯屋さんは注文を受けてから調理を始め、炊きたてを提供してくれるのだ。

私は、今度はもう一方の茶碗によそった海鮮釜飯も頬張り、もぐもぐする。

ああ、こっちもすごく美味しい！ やっぱり複数人で来ると、いろんな味が楽しめていいなあ。

と、どうして今、私と仁科係長が同じ釜の飯を食べたり、携帯を渡したりしているのか。それは、私が社用の携帯を会社に忘れたのが原因だった。

事の発端は、数時間前にさかのぼる――
帰りの電車の中で携帯を忘れたことに気付いた私は、いったん電車を降り、どこに携帯を置きっ放しにしたのかグルグル考えた。

結果、会社の充電器置き場で充電したまま忘れたのではないかと思ひ至り、プライベート用の携帯電話からかけてみた。もしかしたら、残業で残っている人が気付いて、出てくれるかもしれない。コール音を聞きながら、じりじりと待つ。けれど十回ほどコールが鳴っても誰も出ない。明日は土曜だし、さすがに二日所在が分からないままにしておくのは心配だ。

諦めて会社に戻り、確認しようと思つた時、誰かが電話をとってくれた。

『はい。S A E K I 情報システム新事業推進統括本部の仁科です』

聞き覚えのある声に、私はホッと安堵の息をつく。

「係長！ よかったあ！」

電話の向こうでクスクス笑う気配がする。

『携帯電話の忘れ物だね、上条さん』

「そうなんです！ すみません！ どこにありましたか？」

『充電器に差してあったよ』

「やっぱり……すみません。今から急いで取りに戻ります！」

『ずいぶん前に会社を出たと思うけど、帰宅途中だったんじゃないの？ 会社に戻るまでに、どれくらいかかりそう？』

「ええと……電車で途中まで来ちゃいました」

私は周りを見回し、壁に張られた電車の案内板を見ながら時間を伝える。

「電車に三十分くらい乗って、それから会社まで歩いて十五分くらいだから……あと一時間のうちには着けると思います」

『三十分か……』

係長がつぶやき、数瞬の後に言った。

『あと少しで仕事が終わるから、会社の最寄駅の改札口で待ってなさい。携帯を届けてあげるから』

「え、えええ？ だ、大丈夫ですよ。会社に行くくらいの手間は何でもありません」

まさか、まさか、上司に携帯を届けさせるなんて、そんなことはできませんよ！

けれど電話の向こうの人は何でもないことのようにサラッと言った。

『駅から会社まで片道十五分ということは往復で三十分かかるってことじゃないか。遠慮はいらない。俺も同じ駅から電車に乗るし、残業が終わってちょうど帰る頃だから、手間でも何でもない』

「え、でででもっ」

悪いから、と続けようとした私の言葉は声にならなかった。それより先に、こう言われてしまっただから。

『上条さん。好意は素直に受けておきなさい』

優しい声と口調なのに、どうしてだか逆らえない。

『俺に悪いなんて考える必要はない。別に迷惑でもなんでもないから、ね？』

私は逡巡しながらも、結局こう答えるしかなかった。

「は、はい……。お言葉に甘えて、よろしくお願いします」

どうしてだか、この人には逆らえない。

『それじゃ、駅ですれ違うと困るから、連絡用に上条さんの携帯番号を教えてくださいませんか？』

「あ、はい」

番号を伝えると、係長はメモをとっているようだった。

『了解。俺の番号も教えておくから、何か書くものは手元にある？』

「あ、はい」

私は言われるままにバッグからスケジュール帳とペンを取り出し、係長の番号を書き留めた。

「はい、メモしました」

『それじゃ、今から三十分後に駅の改札口で待ってるから』

『どうもお手数おかけしてすみません！』

『本当に手間でもなんでもないので、恐縮する必要はないよ、上条さん』

最後にクスクス笑って、仁科係長は電話を切った。
 優しいけど、それに甘えて上司を使い走りにするってどうなんだろう。許されるんだろうか。突然の出来事に、いささか呆然^{ぼんぜん}としていた私だったが、ちょうど会社へ戻る方面の電車が来たので頭を切り替えた。

とにかく、係長を待たせるわけにはいかない。私は電車に飛び乗った。

この時間、オフィス街へと向かう電車は人もまばらだった。

私は空いている席に腰掛け、ついさつき仁科係長の携帯番号をメモした手帳をじつと眺める。

さつき係長が教えてくれた番号は、〇九〇から始まっていた。社用の携帯はすべて〇八〇で始まるから、つまりこの番号は——秘書課や受付のお姉さま方が喉から手が出るほど欲しがっている、係長のプライベートの携帯番号ということ……

その事実が改めて気付き、ごくりと唾を呑む。

わ、私知ってしまったっていいんだろうか？ 係長ったら、社用携帯の番号でよかったのに……。

私みたいな部下に、こんな個人情報をお伊イ教えては駄目じゃないのか。

たしか社内で係長のプライベート番号を知っているのは、私の直属の上司である田中雅史主任くらいしかいないと聞いたことがある。

……でも、プライベートの番号を教えてくださいってことは、私を信用してくれていると考えてもいいのかな。秘書業務の補佐という役割柄、比較的係長と関わることも多いし、この間は本意な

から早坂のお嬢様と共に戦った戦友でもある。

そう考えると、この番号が何だか信頼の証^{あかし}みたいに思えてくる。

許婚問題を考えると戸惑う部分も多いけど、なんだか係長に認めてもらえたよう……悪い気はしない。それどころか、なんとなく嬉しい。

まあ、教えてもらったところで係長の私用な電話をかける機会なんてないだろうけど……

私は妙にうきうきした気分を手帳を握り締め、電車に揺られていた。

三十分後、会社の最寄駅に着いた私はホームを走り、階段を駆け上がった。できるなら係長よりも先に改札で待っていたかった。

でも、改札口付近に辿^{たど}り着いた私の目に飛び込んできたのは、自動改札機の前で佇^{たぐ}む係長の姿だった。

自然と目が彼に引き寄せられ、すぐに気付いた。背が高くイケメンで、もともと目立つ要素満載の人だけど、それよりなにより彼の周りだけ空気が違うのだ。

うまく言えないけど、一目で何か特別なものを感じさせる、そんな空気だ。

そう感じているのは私だけじゃないらしく、改札を通りすぎる人は、女性はおろか男性でさえも彼を見ている。

その光景は部下として誇らしかったけれど、同時になぜか少し寂しくもあった。

どこにいても人目を引く、特別な人。近くて、でも本当はとても遠いところにいる私の上司……

不意に私がいる方を見た係長と目が合う。彼は目元と口元を綻ばせ、私に微笑みかけてくれた。それと同時に、さっきまで係長が醸し出していた近寄りたいたいオーラが、一気に霧散したように感じた。

そのことに妙な安堵感を覚えつつ、私は足早に自動改札を抜けて係長の所に突進した。

「すみません、係長！ お待たせしちゃって！」

ぺこぺこ頭を下げる。そんな私に係長は優しく笑って言った。

「いや、俺も今、着いたばかりだから気にしないで」

……ああ、なんて優しいんだろう。さっきまで、少なくとも数分は私が遠くから係長に見入ってしまった時間があつたし、今着いたばかりのはずはない。でもそんなことは、おくびにも出さないのだ。

ちよつとじーんとしている私に、係長はスーツの内ポケットから会社用の携帯を取り出して渡してきた。

「はい。これ、君の携帯」

「すみません！ ありがとうございます！」

私はふたたび頭を下げて携帯電話を受け取った。

仕事が終わったらずぐ帰宅したいだろうに待っていてくれた係長を長く引き留めるのは悪いと思ひ、私はお礼を言つてその場を立ち去ろうとした。

その時、いきなり私の手を取った係長が一言。

「じゃあ、ご飯でも食べに行こうか」

そうなることがあらかじめ決まっていたかのような、まるでそのために待ち合わせしていたかのような口調だった。

「……は？」

ポカンと彼を見上げる私の目に映ったのは、にっこりとした明るい笑顔だった。

途端に、私の心の警戒スイッチがなぜか微弱だけど入る。けれど久しぶりだったことと、あまりの不意打ちに脳がフリーズ状態になっていて、警戒しながらもなんの対処をすることもできず――

「夕飯。付き合つてね」

そう言つて、迷いなく私の手を引いて歩き出す係長についていってしまった。

「え？ え？ え？」

このまま電車に乗って帰るものだと思つていたのに、係長はなぜか駅を出ていこうとする。――どうして、こういう展開になるのでしょうか？

「わ、私、門限があるので！」

「知ってるよ。大丈夫、門限までには家に帰れるようにしてあげるから」

「い、いえ、でもですわね！」

「携帯届けてあげたから、お礼だと思つて付き合つて？」

「……そ、それは係長が……」

「金曜日に一人で外食するのは肩身が狭いんだ。だから、上条さんが付き合つてくれるといいなと

思つて携帯を届けたんだよ」

「わ、私じゃなくても、係長が誘えば誰だって喜んで食事に付き合つと思ふんですけど……」

「うん。だから、上条さん付き合つて？」

「……」

「もちろん、奢りだよ。財布のことは気にしないで、好きなだけ食べるといい」

「奢り……。いや、でも……」

「これは上司命令だよ。いいから奢られなさい」

「……………はい」

こうして私は、駅にほど近い釜飯屋に連行されたのだった。

金曜日の夕飯時のせいかわ席はほとんど埋まっていた。かろうじて空いていた和室の一角に私たちは陣取った。

この店は会社の近くにあるから、誰かに会わないとも限らない。私は「誰にも会いませんように」と、密かに天に祈った。

だって、ただでさえ変な噂が蔓延しているというのに、二人きりで夕食を摂っていたなんて知られたらことだ。係長の女性ファンへの反応も怖い！

そのところ、目の前の人は分かっているんだろうか……？

もつとも、噂を立てられて右往左往しているのは私だけで、この上司は噂されようが屁でもない

みたいだけだ。

この間の早坂のお嬢様の騒動があった時、私との仲を疑われた係長の冷静沈着な態度を見て思い知つたけど、この人のスルースキルは半端じゃない。笑みを浮かべて「さあ、どうだろうね？ 勝手に考えれば？」みたいな返答で煙に巻く。

本当に羨ましい限りだ。その能力を半分でもいいから分けて欲しい。

ちなみに、係長がスルーすればするほど、私が質問の嵐に遭うんですけれどね！

私も「ご想像におまかせします」って言いたい。言つてしまいたい。

だけど、動揺しちゃつてうまく言えそうにないし、その噂が巡り巡つてお祖父ちゃんとか伯父さんに伝わりでもしたら取り返しのことになりそうで、必死こいて否定している。

最近は、早坂のお嬢様騒動がようやく収まつてきたのに、そんな矢先にこの携帯騒ぎ、食事付きだ。

……お門違いだけど、あらぬ噂を立てられなくなるには、まずは係長への対策が必要なんじゃないかと思う。係長がもつと噂のことを気にして、私と距離を保つてくれれば！ もつとも、奢りに釣られてのこのこつてきた私も私だけだ。

「何を頼む？」

私の心中など知る由もない目の前のお方は、にこやかにメニューを差し出す。私はそれを受け取りながら、係長が妙に機嫌がいいことに気付いた。なぜだろう。

そんなに一人でご飯を食べるのが嫌だったのだろうか。まあ、金曜日の夜にこの人がお一人様で食事をすることなんて、ほとんどないのだろうけど。なにしろ、最近まで恋人が途切れたことのない

人だったのだから。週末はデートで忙しかったに違いない。

でも最近、しばらく恋人がいらないらしい。相変わらずモテて、ひっきりなしに誘われているらしいけど、見向きもしない——とは、情報通の女子先輩社員・水沢さんみずさわの談だ。

なぜ係長は、急に気変わりしたのだろう。しばらく考えていた私は、ある可能性に思い当たった。まさか、三条家との縁談のことがあるから……？

考えてはみたものの、私は心の中でその考えを打ち消した。

係長は三条家との結婚話にあまり乗り気じゃないと聞いたことがある。だからやっぱり、それを慮おもんばかつて恋人を作らないと考えるのは無理がある。

……だったら、係長の心境の変化の理由は？

私は手元のメニューに視線を落として、むうと眉をひそめた。

……私、なんでこんなに気になるのだろう。係長の恋人の有無なんて、私にはまったく関係ないのに。

メニューを見ながら唸うなる私に、係長が笑った。

「先に飲み物を注文しようか。来るまでの間、ゆっくり考えるといい」

どうやら注文で迷っていると思われるらしい。私は慌てて、メニューに目を通した。

……これは本気で迷う。

期間限定のきのこと釜飯も美味しそうだし、エビやカニが入った海鮮釜飯も美味しそう……

「何で迷ってるの？」

「え？ あ、きのこと釜飯にするか、海鮮釜飯にするかで迷ってます」

私の返答に、係長は優しい笑みを浮かべた。

「じゃあ、二つ頼んで分け合えばいい。そうすれば、どっちも食べられるからね」

「い、いいんですか？ 係長、何か食べたいものがあつたんじゃない……」

「いや、具体的な希望があつたわけじゃないから。それに、目の前で上条さんが美味しそうに食べる顔を見られるのが、俺にとつてなによりのご馳走ちきうだよ」

おおお、何かちよつと甘い台詞せりふキター!!

……ちよつと動揺したけれど、本当は分かっている。係長がこんな風に言ったのは、私が遠慮なく注文できるようにするためだつてこと。

「やだなあ、係長つてば、私を甘やかしすぎですよ。だけど、お言葉に甘えて、きのこと海鮮を注文しちゃおうかな？」

エへへと笑った私に、なぜか係長はちよつと苦笑していた。

「お世辞でも冗談でもなかったんだけど……まあ、いいか。遠慮しないで二つ頼みなさい」

結局、私はきのこと釜飯と味噌汁、お新香がセットになったものと、大根のサラダを注文した。係長は海鮮釜飯と味噌汁、お新香だけじゃ足りないらしく、お刺身がセットになったものを頼んだ。注文したものが届くまでの間、上司と二人きりでさぞ気まずい時間を過ごすことになるだろうと思つたら……係長はすぐ話題豊富で、緊張や遠慮なんてさっぱり吹き飛んでいた。

係長が新人の時のことや、上司の笑えるエピソードなどを面白おかしく話してくれた。私も研修時代に遭遇した、他部署の奇妙な習慣とかについて、気付いたらペラペラしゃべっていた。

そうこうしているうちに、着物姿の給仕さんが私たちの席にやってきた。

「お待たせしました」

「わあ、美味しそうな匂い！」

目の前に置かれた釜から、いい匂いが立ちのぼる。

実は、周りの席から漂う美味しそうな香りに、お腹がキューツとしていたのですよ。私はさっそくお釜をかき混ぜて、二つのお茶碗にきこの釜飯をいそいそとよそった。その間に、目の前でも係長が海鮮釜飯をお茶碗によそっている。

「はい。係長、きこの釜飯です」

「ありがとう。じゃ、これ、上条さんの分の海鮮釜飯ね」

言いながら、お茶碗を渡し合いつこした。

傍から見れば恋人同士みたいに見える光景……だけど、この時の私の目には、釜飯しか映っていないなかった。

エビがプリプリして美味しそう！ カニカマじゃなくて、本物のカニのほぐし身がのってる！

お茶碗に魅入っている私の向かいで、いきなり係長がクスクス笑った。

「これで同じ釜の飯を食った仲ってわけだね」

「あ、そうですね、文字通り！」

私もそう言って笑った。

上司と部下だから、同士ののような意味合いの慣用語として使うのは語弊があるけれど……今の私たちは本当に文字通り「同じお釜のご飯を食べた仲」だから間違いないじゃない。

「それじゃ、頂きます！」

「……頂きます」

軽く手を合わせて宣言すると、私はさっそくきこの釜飯の入ったお茶碗を手にとった。

数種類のきこの釜飯を誘う。さっそくご飯を口に運ぼうとした時、不意に係長が声をかけてきた。

「あ、そうだ。上条さん」

「はい？」

私は茶碗と箸を持ったまま顔を上げた。向かいに座った係長は、そんな私を見てにっこり笑う。

「さっき教えてもらった番号は、私用の携帯番号だね？ せっかく教えてもらったから携帯に登録したいんだが」

「え？ あ、そういうえば私も係長の番号教えてもらいましたけど、あれって……会社のじゃなくて……」

「……」

「ああ、あれは私用のだよ」

ひよえええ。やつぱり！

「い、い、いいんですか、私に教えちゃって？ 内緒にしておいた方がいいんじゃないですか？」

係長があまりに軽く言うものだから、私の方が、かえって焦ってしまう。そんな私を見て係長は

くすりと笑った。

「いいんだよ。だって上条さんは人の番号をホイホイ他人に教えたりしないだろう？」

「もちろん、そんなことはしません！ けど……」

「だから教えたんだ。さ、冷めるから早く食べよ？」

係長は茶碗を握りしめた私の手元に視線を落とし、付け加える。

「あ、はい」

ようやくご飯を口に運んだ私は、先ほど係長に言われたことも嘯みしめ、じんわり喜びを感じた。やっぱり、係長は信頼してるから番号を教えてくれたんだ。

ほくほくしながら、私は釜飯を頬張った。けれど、嬉しさに浸っていられたのは束の間で、係長の次の言葉を聞いた瞬間、笑っている場合じゃなくなった。

「というわけで携帯電話出して……？」

差し出された手を、ポカーンと見つめる。

——そして話は冒頭に戻るのです。

赤外線通信で番号を転送し合うから、携帯をよこせと言っているらしい。

たしかにさつき、お互いの番号は教え合ったけれど、赤外線通信をしたらメールアドレスとかも一緒に知ることになってしまうのでは……？ それに万が一、係長の番号を電話帳に登録しているのを誰かに知られたら、騒ぎになってしまうかもしれない……だから私は、登録はしないつもり

でいたのに。

けれど、目の前の人は赤外線通信するのは、すでに決まったものといった様子で私を促している——笑顔で。

私はきのこ釜飯を頬張ったまま、交わした会話を思い出してみた。が、承知した記憶はない。

これは上司命令なのだろうか……？

あれこれ考えたけれど、番号を交換している今、そんなことはたいした問題でもないように思えてきて、従うことにした。電話をかけることはないと思うけど、知っていたら何か役に立つことがあるかもしれないしね！

私はご飯を咀嚼して呑み込むと、素直に携帯電話を係長に預けた。

そして彼が二つの携帯電話をピコピコと操作している間に、私の意識はふたたび食べ物の方へ移ってしまった。だって、いい匂いのものが目の前であって我慢できる？ 温かい方が美味しいと分かっているのに、冷めていくのを見過ごせる？

口を忙しく動かしていた私は、だから気付けなかった——携帯を操作する係長の顔に、うつすらと黒い笑みが浮かんでいたことに。

やがて操作を終えた係長が、私に携帯電話を差し出した。

「はい。登録できてるか調べてみて」

「分かりました」

私は箸を置いて、電話帳を開く。な行に『仁科彰人』の名前が新たに登録されていて、何か不思議な感じがした。

本当に係長の番号、登録しちゃったんだ——

秘書課のお姉さま方にバレたら、非常階段に呼び出しフラグが立ちそうだな。自分の身の安全のため、これは絶対に内緒にしておかないと。

登録されたばかりの係長の項目を確認すると、電話番号、メールアドレスだけでなく、自宅の電話番号まで記されていて、私は仰天した。

「こんなにいろいろと教えちゃっていいんですか!？」

個人情報流出に危機感はないんだろうか、係長ってば!

慌てる私に、係長はにっこり笑う。

「別にたいそうなことじゃないし。言っただろう? 信頼しているから教えたんだって。それに——」不意に係長は言葉を切った。そして、私を見て今までは違った種類の笑みを浮かべて言った。

「それに、そのうち絶対に必要になるから、いいんだ」

「——は?」

なんだろう。今一瞬、笑顔が黒く見えた!? いやいやいや、まさか、係長が?

我が一族の腹黒っ子、瀬尾涼も顔負けの黒い笑みを浮かべたような気がして、思わず目をこすってしまった。けれど、次に見た係長はいつもの柔和な表情を浮かべていて——

「じゃ、冷めないうちに食べようか」

「——は?」

「大根サラダ、少しもらっていいかな。刺身をあげるから」

「え? え、ど、どうぞ?」

「ありがとう。あ、お腹に余裕があったらデザートも注文するといー」

「え? いいんですか?」

「もちろん。付き合ってくれたお礼に、何でも奢ると言ったのはごっちゃだよ。遠慮することはない」

「ありがとうございませす!」
以降、私は係長による嬉しい食攻めに遭い、さつき見たような気がした黒い笑顔のことも、意味深な言葉のことも、すっかり忘れてしまった。

——私がこの時の言葉の意味を知るのには、もうしばらくあとのこと。

第3話 飲み会狂想曲

「それでは新教育システム稼動を祝って、乾杯!」

課長がビールジョッキを高くあげると、周りの人間も一斉に各々飲み物を持ち上げる。

「乾杯!」

私も巨峰サワの入ったグラスを片手に声を出し、隣にいた仁科係長とグラスをカチンと合わせた。次に、反対隣に座っている田中主任とグラスを合わせ、そして向かいの席に座る先輩女性社員の水沢さん、川西さんと次々グラスを合わせていく。

今日は飲み会だ。

去年から制作していたインターネットを使った新教育システム——「Eラーニングシステム」の仕事に携わった人たちのだ。

このEラーニングシステムは、今では教育事業本部という部署が中心になって制作・運営しているけど、元々は事業統括本部が行っていた仕事だった。

私がこの部署に所属されてすぐに携わった仕事で、感慨もひとしおだ。

いろいろ苦労した事業だけど、テスト運営を終えて今回めでたく正式に稼動することになった。それを祝つての飲み会だ。

最初のうちだけとはいえ、事業に関わったから、今回の飲み会にも事業統括本部の面々がお呼ばれしている。

「係長がこの手の打ち上げに参加するなんて珍しいですね。今、忙しいのに」

私の向かいに座っている水沢さんがビール片手に係長に話しかけた。

今回こうして参加している仁科係長だけど、普段はあまり飲み会には参加しない。といつても出席しないのではなくて、顔を出してすぐに会社に戻ってしまうのがいつものパターンだ。

常に忙しくて、滅多に最後まで参加できないのだ。

ウーロンハイを手にした係長が笑った。

「たまには息抜きしないとね。だけど、ちよつと仕事を残してるから、途中で抜けて会社に戻ろうと思ってる」

「え？ やっぱり会社に戻るんですか？ あ、だからあまり酔わないようにチューハイなんだ」

「ああ。仕事が残ってるのに水割りだの熱燗だのはマズイだろう。チューハイくらいがちょうどいい」
巨峰サワー片手に、二人の会話を聞きながら、私はふと疑問に思った。

——そういえば、なんで私、主任と係長の間挟まれてるんだろう？

帰り際、秘書業務で突発的な用事が入った私は今日、定時に上がれなかった。だからみんなには先に行ってもらった。私が店に着いた時にはみんな着席してて、

「上条ちゃんは門限で早く帰るから、通路側の席の方がいいよね」

つて、川西さんに言われるまま、主任の隣に座ったのだ。そしてその後、さらに遅れてやってきた係長が当たり前のように座ったんだ。

しばらくして、全員揃ったから乾杯だということになって、飲み物を注文したりとバタバタしてたから気にも留めなかったけど、上司二人に挟まれているこの席つて、どうよ？

いや、二人とも良い上司なんだけど？ あまり気負わずに話をできる人たちなんだけど？

だけど、イケメン男性社員に挟まれて、周囲からの妬ましがね視線が痛くて仕方ない。きっとここにいる女性の大半は私のこの席に座りたがっているに違いないよ。

できれば向かいの女の園に行きたかった。けれど、私は門限があるから途中で飲み会を抜けるし、そうなると、通路側のこの席の方が都合がいいのは確かだ。

居心地の悪さを感じながら巨峰サワーをちびちび飲んでみると、いきなり係長に話しかけられた。「上条さんも途中で抜けるんだよね？ 門限があるから」

「え？ あ、はいそうです」

「じゃあ、抜ける時、一緒に駅まで行こう。ここは歓楽街だから、その方が安全だろう？」

「え？ い、いいんですか？」

「ああ、どうせ会社に戻るには駅に行かなくちゃならないんだしね」

いつもの私なら「え？ 大丈夫です。一人で平気ですよ！」って遠慮していただろう。……ここが歓楽街のど真ん中じゃなければ。

会社がある駅の西側はビジネス街とかビル街だが、今いる駅の東側は、飲食店やクラブ、バー、それにラブホテルが乱立している。

この居酒屋からは駅まで歩いて十分足らずとはいえ、女性一人で歩くには勇気がある場所だ。

客引きが多くて、ここに来るまでもホストクラブの店員と思しき男の人のしつこい勧誘に遭って辟易した。

帰りはダッシュで突っ切るしかないと覚悟していた私に、係長の申し出は渡りに舟だった。

「で、ではよろしくお願いします」

私は恐縮しながらも係長に頭を下げた。これで帰りは安心だ。

……やっぱり係長は良い人だ。

私が感謝の意とともに笑顔を向けると、係長からも優しい笑顔が返ってきた。それが嬉しくてさらに笑顔になっていると、いきなり反対隣から声が上がった。

「痛っ」

田中主任の声だった。

「お前、何をしているんだ？」

係長は笑顔が消して、私の頭ごしに怪訝そうに主任に尋ねる。

「あー、いや、足がな……」

と田中主任はなぜか苦笑い。

「私のパンプスのヒールが主任にぶつかっただけです。お騒がせしてすみません」

ホホホ、となぜか主任のあとを継いで笑いながら答えたのは、川西さんだった。

確かに二人は向かいの席に座っているから、足がぶつかってもおかしくないけど。でも、川西さんの笑い方が妙にわざとらしくったように思うのは気のせいだろうか……。それに何だか「ちっ、使えねえ」とかいうつぶやきが聞こえような……

使えないって主任のことだろうか？

二人の顔を交互に探ったけど、苦笑したままの主任と、艶やかな微笑を浮かべる川西さんからは、その不自然なやり取りの意味をうかがい知ることはできなかった。

「それより係長、上条ちゃんのことをよろしくお願いします。きっちり間違いないで送ってあげて下

さいね」

にっこり笑ったまま、川西さんは係長に言った。その言葉を聞いて係長の怪訝けげんそうな表情が一転して苦笑めいたもの変わる。どうやら何か察したらしい。

「ああ。肝きまに銘めいじるよ」

本当にわけが分からない。ひとり蚊帳かやの外で頭の上に「？」マークを飛ばす私だった。

……これは、かなりあとになって知ったことだけど、川西さんはこの時、係長が送りオオカミになつて私をラブホテルとかに連れ込んじやないかと心配していたらしい。それで止めるという意味を込めて主任を蹴り飛ばし、係長には牽制けんせいするつもりでああ言ったのだという。

だけど、そんなことは夢にも思わない私は、何気なく室内に視線を巡らせていたら、教育事業本部の女性社員たちと目が合い、それどころじゃないことに気付いた。

なぜなら、以前にも増して、私を見る目が鋭くなっていたから。しかも何人かは、こつちをチラチラと見ながらヒソヒソ話をしているじゃないか。

どうやらさつき、係長と笑みを交わしていた場面を誤解されたようだ。……感謝の意を表していただけだったのに。

私は内心マズイと思つた。この上、二人で居酒屋を抜けるのがバレたらどうなることやら、だ。

同じ部署の人たちは私に門限があることを知っているけど、他の部署の人たちは知らない。そして、係長が仕事のために会社に戻ることもまた、この席に近い人しか知らないだろう。

だから何も知らない人たちは、私と係長が同時にいなくなったことを『二人でイケナイコト』を

するためだと誤解するんじゃないだろうか……。すでに笑みを交わしている場面を見られていて、誤解の素地はある。

それは困る。非常に困る！

これ以上噂になったら、係長のファンに総スカンを食らうこと間違いなしだ。

今まで面白半分を広められていた噂と違って、『飲み会を二人で抜けた』というシチュエーションは妙に現実的だ。仲を誤解する人は多いだろう。

それに、心配なのは係長ファンのお姉さま方だけではない。

その噂が巡り巡って三条家に届いたりしたら、藪やぶを突いて蛇が出てしまうじゃないか！

透兄さんが関わってないだけに、伯父さんとかお祖父ちゃんの反応がそら恐ろしい。

でも、歓楽街を一人で歩くのは怖いし、係長がせっかく送ってくれるっていうのを今さら断るのも……

グラスに口をつけながら、私は密かに決心した。とにかくこのイケメンバラダイスな席から離れることにしよう。二つの席がぼっかり空くより、別々の席から抜ける方が、目立たずに済むはずだ。そう考えていると、実にタイミングよくビールのグラスを手に課長が係長のところにやってきた。

「仁科君、乾杯だ」

「課長」

仁科係長はにこやかに微笑むとウーロンハイのグラスを課長のビールグラスと合わせた。

「いつも君には世話になつてるからね。こういう時でないと、じっくり礼も言えん」

「そんな、礼には及びません。少しでも課長のお役に立ちたくて」

「君が部署の方をきちんとまとめてくれていてから、俺は安心していられるんだよ」

と、お互いを讃え合う上司二人。

これは、席を離れるチャンスだ。係長が課長のお相手をしている間に、私は別の席に移るのだ。ちようど、話をするため席を立つ人が出始めたから、あっちこっちに飛び石のように席が空いている。

あそこに移ればいい。そう思っつて、腰を浮かした時だった——係長が顔を課長の方に向けたまま、私の腕をつかんだのは。

え？　と思う間もなく、引っ張られてストンと席に戻された。

「——へ？」

係長は課長のいる反対側を向いたままだ。こっちは全然見てない。見てないのに、なのに、手だけはしっかりと私の腕をつかんだまま離さない。

こ、これじゃ席、移れないじゃないですか！

隣でボソッと田中主任が「諦めろ」とつぶやいた。

何で——?!

私は内心、絶叫した。

何で私は席を移っちゃいけないの？　それと、何で係長は私の腕をつかんだままなの？

つかまれた手首と、反対側を向いて課長と話している係長の後頭部を交互に見ながら、私は混乱

していた。

幸い、机の下の出来事だったから、係長に腕をつかまれているのが他の人からは見えない。ただ、こんなことをする係長の意図がさっぱり分からなかった。

だから隣で「諦めろ」と、忠告めいたつぶやきを発した田中主任の方を見て、今の状況について問いかけた。といつても口にしたわけじゃなくて、反対側の手でつかまれている手首の部分を指差して「コレナニ？」と目で訴えるというものだったけど。

主任はなにやら微妙な顔つきで私と私の腕をつかんでいる係長の手を見て、小さな声で言った。

「お前に席を移るなど言ってるんだらうさ」

「いや、それは分かるんですけど、理由が……」

「お前に隣にいて欲しいんだらうさ」

「だから、なぜ？」

「……自分で考えろ」

主任は「なんでこんなことも分からないんだらなあ」と言わんばかりの口調だった。しかもなぜか痛い子でも見るような目で私を見ている。

目の端に映った主任の向かいの川西さんまで生暖かい目を向けてくるし、私はますます訳が分からなくなった。

どんな理由があつて、係長は私を隣に置きたがるのだろうか。私が隣にいなきゃ駄目な理由。それは何？

……さっぱり思いつかない。

だけど、ふっと視線を店の奥に転じた時、まともや教育事業本部の女性社員数人と視線がかち合い、不意に理解できた気がした。

ここで私が課長に席を譲っても、課長はきつとまた誰かに話しかけるためフラフラ別の席に行くだろう。この席は、ここにいる女性の大半が座りたがる席だ。空いたらすぐさま誰かが座る。

そう。係長狙いの女性が！

でも係長は会社の女性とは付き合わないと決めているようなので、媚を売られても煩わしいだけだろう。水沢さんによると、係長があまり飲み会に出ないのは、そのせいもあるらしいから。

つまり、係長は私が席を立て、代わりに自分に気がある女性に座られるのが嫌なんだ。面倒だから。だから私をここに留めておきたい。

「何となく理由分かりました」

私は訳知り顔でうなずいた。要するに、女避けだ。

「いや、たぶん、お前の考えてることは違うと思うぞー？」

主任が何やら小声でつぶやいていたけど、係長が私の腕をつかんでいる理由を察してすっきりした私は、あまり聞いていなかった。

そう、女避けだ。だから私の逃亡を阻止したに違いない。係長はモテるし、恋人はとつかえひつかえだけど、女性に囲まれて喜ぶタイプじゃないから。

私は自分のつかまれた腕に視線を落として、次いで係長の柔らかそうな髪に覆われたうしろ頭を

見て、うん、と心の中でうなずいた。

これ以上、女性社員の方々に睨まれたくはないけど、仁科係長にはすぐお世話になってるし、いつも助けてもらっている。だから今度は私が彼を助ける番だ。

やってあげようじゃないですか、女避けを！

私は心の中で握りこぶしを固めてそう決心した。そして、なぜか決心してしまうと、さっきまで気にしていたことが嘘のように気にならなくなった。噂とか女性社員のお姉さま方の視線とかが。

考えてみれば、鬢鬢を買うのは今に始まったことじゃないし、すでにたくさん買っている。

それに、懸念している帰りの時も、係長に時間を指定してもらってさり気なく別々に出れば、それほど目立たないで済むかもしれない。

なんてことをつらつら考えていると、やがて話を終えた課長が教育事業本部の主任のところに行ってしまう。係長はそれを見送り、私の方を急に振り返った。

思わず、うっと身構えると――

「俺から離れない方がいいよ？」

笑顔で私の手を離しながら、開口一番そう言った。

「――はい？」

「俺の傍から離れない方がいいってこと。でないと、ここを出る時に事情を知らない人たちの前で君に声を掛けて店を出ることになるよ？」

「……ゲッ」

私はその場面を想像して青ざめた。そう。こんな場面を。

——門限のせいで私が早く店を出ることも、係長が会社に戻るために切り上げることも知らない人たちの前で係長が私に呼びかける。係長のことだから、もしかしたら笑顔で言うかもしれない。

『上条さん、もうそろそろ帰る時間だよ』

そしてみんなの前で揃って店を出て行く二人——

洒落しゃれにならん！ 何かのフラグがいっぱい立つよ！ 非常階段に呼び出しか、強制婚約とかいう名のフラグが！

「噂になるかもね。それはマズイだろう？」

天からの声——いや、悪魔からの声に、私はコクコクとうなずいた。

「でも、この席なら事情を知ってるメンバーばかりだから気にすることははない」

私はさらにコクコクとうなずく。

「だから、君はここで俺の隣にいたほうがいいと思うよ」

私はうなずきかけて、アレ？ と思つて顔を上げた。

「あれ？ 係長が私を引き止めたのつて、それが理由ですか？ 女避けじゃなくて？」

「……女避け……？」

今度は係長が首をかしげる番でした。

「そうきたか……」

隣で田中主任がつぶやいている。何がそうきたのかは分からないけど、係長の様子じゃどうも女避けは私の思い違ちがいだつたようだ。

「女避け……女避けね。……そうだね、女避けもしてもらおうかな」

すばやく驚愕きょうわくから立ち直つた係長がうつすら笑みを浮かべながら言った。

「え？」

おなじみの警戒モードに入る間もなかった。

「だからね、上条さん」

笑みを浮かべたまま係長が私を見下ろす。

「そう、女避けのためにも、君は俺の傍そばにいなくちゃいけないよ」

「……へ？」

「いいね？」

につこり笑う係長。その笑顔と有無を言わさない口調で念を押されて、私は思わずうなずいていた。つて、あれれ？ ……確かに元々、女避けしてあげようと決心していましたよ？

だけど……何かが違う。激しく違う気がする。

腑ふに落ちないものを感じて係長を窺うかがうも、目が合うと係長は眼鏡の奥で目を細めて笑うだけ。しかも私の巨峰サワーが残り少なくなっているのを目ざとく見つけ、メニューを私に渡しながら言った。

「はい。途中で抜けようが会費は取られるんだから、今のうちにどんどん頼んでおいたほうがいいよ」
「え？ あ、そうですね」

胸の中でもやっとしたものを感じつつ、私は言われるがままにメニューに視線を落とす。

——そんな係長とのやり取りや、依然として心の中で渦巻くもやもや感、そして会費分を回収しようとする貧乏根性に気を取られていた私は気付かなかった。

「上条ちゃん、丸め込まれてるわよー」

「それ以前に、あんなにあからさまなのに、なんで気付かないのか、俺はそっちの方が不思議でたまらん」

もどかしそうに川西さんと田中主任がそんなことを小声で話しているのも、部署のみんなが、こんなことを言っていたことも。

「すごい会話聞いちゃったわ。ツッコミ所満載」

「係長、策士ですね。上条さんの逃げ場、全部奪いましたよ」

「つてか、仁科係長つて意外と押しが強んだね。いや、押しが強いというか……腹黒い？」

そして――

「ライチサワーなんて美味しそうですね」

「マンゴーサワーなんてのもあるよ」

「あ、それも美味しそうですね。迷います」

「両方とも頼めば？ 飲み放題なんだし」

「帰るまでに二杯も飲み終わりますか？ それにいきなり大量に飲んじゃうと酔っ払うかも……」
「少し酔ってもちゃんと送っていつてあげるよ」

「あはは、ありがとうございます。んじゃ、お言葉に甘えて両方とも頼んじゃおうかな？」

「そうしなさい」
——私たちの会話が終わるとまるでバカップルのようだった、なんてことも。

* * *

「係長、お待たせしました！」

私は居酒屋の外で待つてくれた係長のところへ小走りで駆け寄りながら言った。

さすがに堂々と二人で店を出るわけにはいかなかった。先に係長が店を出て、それから十五分くらい経ったら、今度は私が出るという具合で待ち合わせた。

係長を待たせるのが悪くて、最初は私が出て待つという案を出したのだけど、歓楽街で危ないからと即却下されたのだ。

確かにこの場所で女一人、十五分もポツンと立っていたら、酔っ払いつか客引きとか、いろいろ危ないかもしれない。そう考えて、私は係長に甘えることにしたのだった。

待たせてすみません、と頭を下げる私に係長は優しく笑う。

「ちょうど携帯で家族に連絡したりしていたから、そんなに待った気はしないよ。だから気にしな